

第1回研究発表会 発表要旨

英語英米文学会は1997年4月7日に本学において、第1回研究発表会と大学院文学研究科新生の歓迎記念講演を、国際文化学会および人間科学会と共催した。多数の会員および新院生の参加を得て、4名の準会員の研究発表と沖浦和光名誉教授の記念講演がなされた。研究発表をした4名の準会員のうち、英語英米文学専攻の1名の発表要旨を以下に掲載する。

Pearl の天使性に関する考察

工 藤 朋 子

Nathaniel Hawthorne (1804-1864) の *The Scarlet Letter* に登場する Pearl は天使であるといえ、たいていの読者は奇異に思うかもしれない。だが、Pearl は天から遣わされた使者なのだ。何のために遣わされたかを考察してみよう。

Hester Prynne は、牧師である Arthur Dimmesdale と姦通の罪を犯す。そして、その罪の象徴としてAという緋色の文字を胸につけることになる。この作品で罪を象徴するものはそれだけではない。彼らの子ども Pearl もまた罪の象徴なのだ。そして Hawthorne は、人間存在を罪と不可分のものとして描く。

Pearl には、天使的イメージがつきまとう。彼女には人間を超えたところがあるのだ。彼女の真実を見ぬく力、容姿の完全性などが天使らしさを示している。Hawthorne は天使を登場させることによって、一見暗いこの作品に光を与えようとしたのだろうか。Pearl と光には深いつながりがある。例えば、16章で Pearl と母親が森の中を歩いているとき、彼女は光と戯れ、

光を捕まえるのだ。とても普通の人間にはできないことだ。

光がなければ我々は色を見ることができない。Pearl という光があつてこそ緋文字が存在し、物語が成り立つのである。彼女は、Hester が腹を痛めて産んだ子であると同時に、生きた緋文字でもあるのだ。母娘が一緒に歩いているのを見た町の子どもたちは、Pearl が Hester にそっくりだと言うのではなく、緋文字にそっくりだというのである。緋文字と Pearl、両者の存在意義は同一のものである。

Hawthorne は、よく鏡を作中に取り入れる。Hawthorne の描く様々な鏡のイメージを検討していくと、Pearl が鏡の役割を演じていることに気づくのだ。Hester や Dimmesdale が心の中に閉じ込めている秘密が、無心な幼児 Pearl の口からこぼれ出ることがある。秘密を暗示的に言い表すだけでなく、彼女の思いがけない動作が時として鋭く緋文字の真実を指し示すのである。*The Scarlet Letter* における鏡は、目に見えるものを映すよりも、むしろ心の内側にある真実を映し出すものである。そして Pearl はまさに Hester と Dimmesdale の内的実在を映し出す鏡なのである。

生きながら死んでいるような状態であつた Dimmesdale は、Pearl が自分の子どもであることを民衆の前であかし、罪を告白することで彼の魂は安らぎを得る。Hester も罪の意味を知り、自らの意志で緋文字を生涯胸につけて生きる。両親を神意の方向に導くという使命をまっとうするまでの Pearl には子どもらしからぬ厳しさがあつた。天使というものは、善い方向へ導くためには時として厳しさをみせる。彼女の存在によって Hester も Dimmesdale も進むべき道へと向かっていったのだ。使命を成し遂げたその時の Pearl は7歳である。キリスト教において完全を表す数字である。Hawthorne は Pearl の人間性を描きつつ、同時に両親を導く天使性を備えたものとして描いているのだ。